

いったい何が起きてるの!? マンスプレイニングを分析する

三木那由他

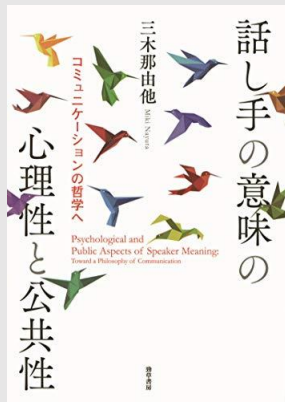
miki.nayuta.hmt@osaka-u.ac.jp

自己紹介



詳しい経歴等
はこちら

- 三木那由他(みきなゆた)
- 専門は分析哲学、特に言語とコミュニケーション
- 「コミュニケーションとはそもそもどういう営みなのか」をテーマにしばらく研究していた
- 最近はコミュニケーションが不当なものとなり、誰かにとって暴力的になる状況について考えている



マンスプレイニングについて考
える

ほかの客たちが夏の夜の戸外へとそぞろ歩いていく中、私たちは待たされた。それから、ざらざらとした風合いを残した天然木のテーブルに促され席に着くと、男はこういった。

「それで？ 君は二冊ほど本を出してるそうだが」

「ええと、あと何冊かはあるんですが」と私は答えた。

友人の七歳の娘にフルートのレッスンについてしゃべらせるときのような調子で、彼はいった。「で、何について書いているの？」

当時六、七冊は出ていた著作は内容的にバラバラだった。そこで私は二〇〇三年のその夏の日の時点では最新作だった、『影の河 エドワード・マイブリッジとテクノロジーの西部』に話を絞ることにした。時空間の消滅と日常生活の産業化についての本だ。

マイブリッジの名前を出すや、彼は私を遮った。「今年出たばかりのマイブリッジ関連のとても重要（インポート）な本を知ってるかね」。

無邪気な娘役を演じることに夢中になっていた私は、自分の本と同じ主題の本がその年に出ていたのに見落としていた、と危うく信じかけた。男はすでにそのとてもインポートな本とやらについて、ああだこうだとまくし立てていた——その表情にはすごく既視感があった——はるか彼方までおよぶ自分の権威、そのぼんやりと霞む地平線をじっと見つめながら滔々と長話をする男の、自己満足しきった表情。

[...] ミスター・インポート氏が、私が当然知っているべき件の本について自慢げに語っていると、サリーが「それ、彼女の本ですけど」と割って入った。というか、とにかく男を黙らせようとした。

だが彼は聞いちゃいなかった。「だからそれ、彼女の本ですって」とサリーが三、四度繰り返したところで、ようやく彼は理解した。

(レベッカ・ソルニット著・ハーン小路恭子訳『説教したがる男たち』左右社、2018年、8-9頁)

マンスプレイニングとは

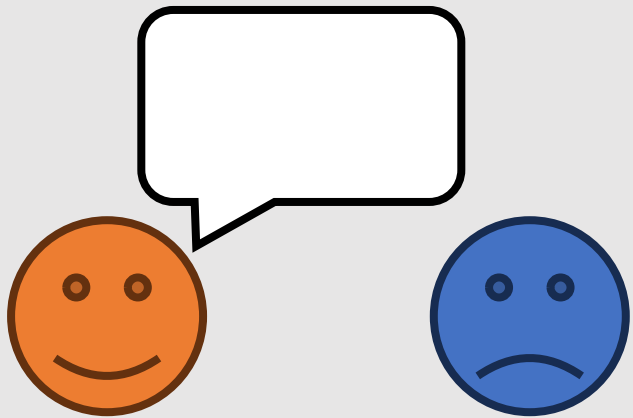
- 男性が女性に対し、頼まれてもいない事柄について自信たっぷりに、相手の女性が無知であると決めつけつつ何かの説明をすること
- しばしば、女性側のほうがむしろ専門的知識を持っている状況でなされたりする

いくつかの前提

- ジェンダーの関わる問題であって、単に個人の性格や心理の問題ではない
- マンスプレイニングは単に不快だけではなく、構造的な問題をもたらす
- 個々のマンスプレイニングの事例は、個人がおこなう具体的な発話によって構成される
- マンスプレイニングにはいくつかの種類がある(Johnson 2020)が、今回は女性の側が説明を求めているという誤解がきっかけに起こるマンスプレイニングを取り上げる

私が注目しているポイント

マンスプレイングが起こる現場は
個人と個人とのコミュニケーション



けれど、社会構造との関係のもと
で生じている現象でもある

男性

それ以外

マンスプレイングは、個人と社会がコミュニケーションの場面でどのよう
に影響しあっているのかを見るためのモデルケースとなる

説明すべきこと

1. 会話の場面において、何がマンスプレイニングのトリガーとなるのか
2. マンスプレイニングは何をもたらすのか
3. マンスプレイニングが生じているとき、その会話にジェンダーがどのように関わるのか

注意しておきたいこと

- 以上のことを、個別に説明するのではなく、互いにつながったものとして説明する必要がある
- ただし、マンस्पレイニングに特化した説明ではなく、ヘテロस्पレイニング、シスस्पレイニングなどなどといった、ほかの「Xस्पレイニング」にも適用できる説明が望ましい

既存の哲学的研究

- 「認識的不正義」からマンスプレイニングを説明する研究
 - Frederico Luzzi (2016) “Testimonial Injustice without Credibility Deficit (or Excess)”. *Thought*, 5(3): 203–211.
 - Nicole Dular (2021) “Mansplaining as Epistemic Injustice”. *Feminist Philosophy Quarterly*, 7 (1). Article 1.
- 「言語行為」からマンスプレイニングのトリガーを説明する研究
 - Casey Rebecca Johnson (2020) “Mansplaining and Illocutionary Force”. *Feminist Philosophy Quarterly*, 6(4). Article 1.

注目点

- 「説明」という行為そのものの仕組みというより、そもそもなぜこの文脈で「説明」という行為が可能なのかがしばしば注目される

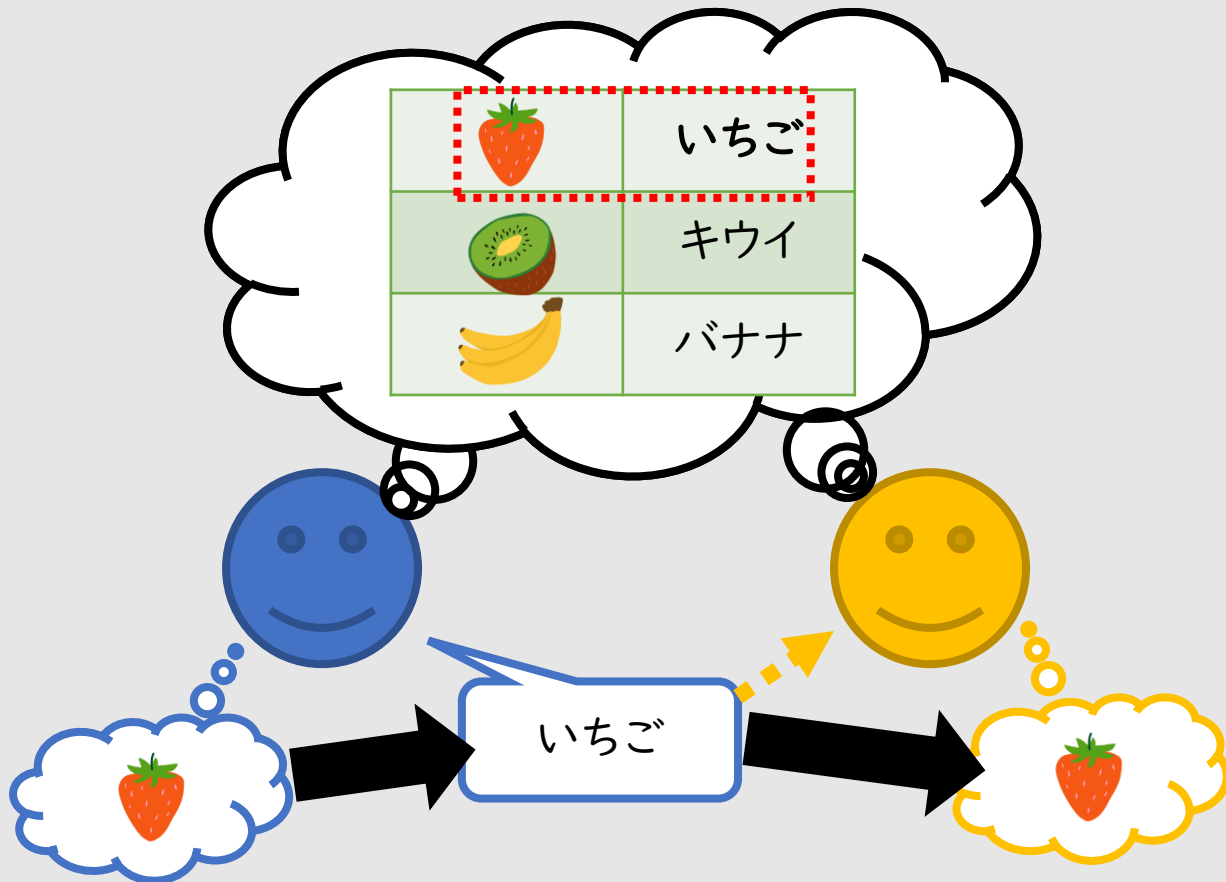
使う道具立て

- 「意味の占有」
- 言語行為
- 調整（アコモデーション）
- 認識的不正義

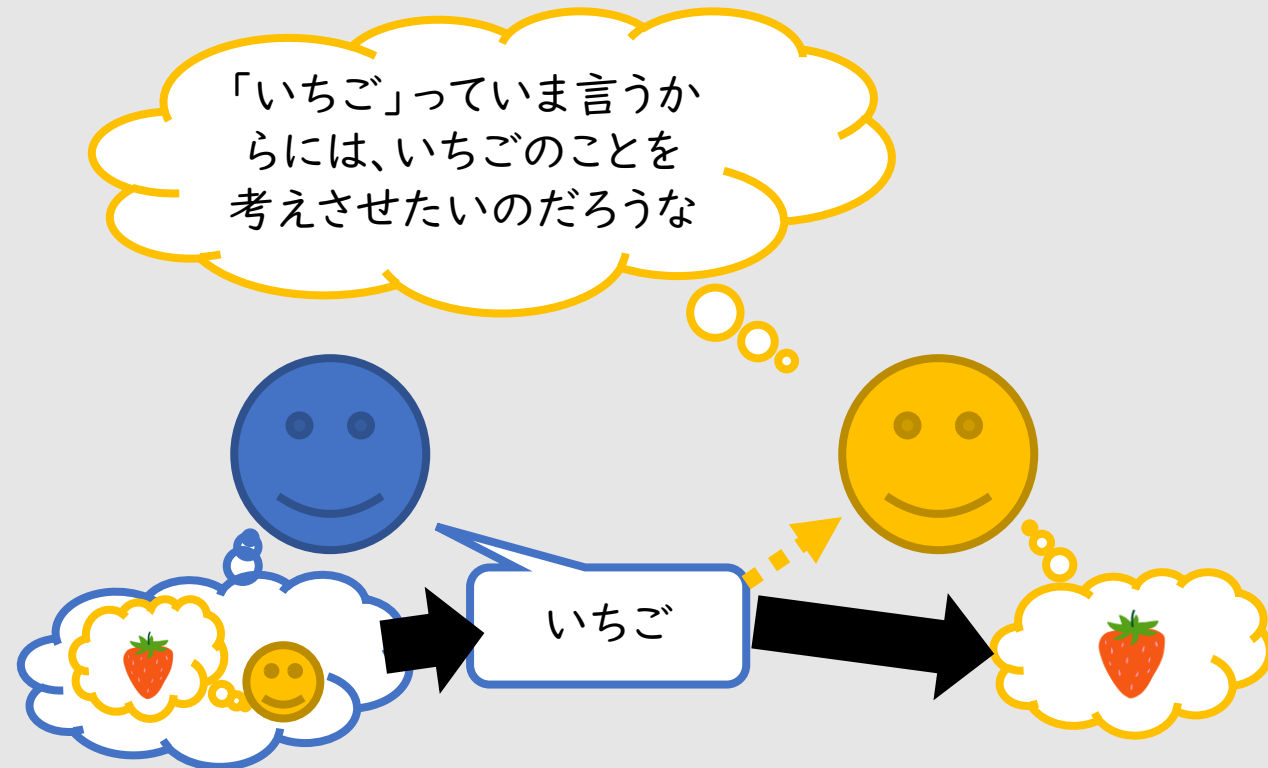
コミュニケーションと
「意味の占有」

よくあるコミュニケーション観： バケツリレー式でコミュニケーションを捉える

参考：D・スペルベル&D. ウィルソン『関連性理論』（研究社）



伝統的な見方



ポール・グライス『論理と会話』（勁草書房）

コミュニケーションは「バケツリレー」ではない

- 「バケツリレー」は、多くのひとがコミュニケーションについて考えるときに真っ先に思い浮かべるもの
- でも、実際には「バケツリレー」になっていないコミュニケーションがいろいろとある
- 例えば、お互いに嘘だとわかっているのにそれをあえて指摘せずに続けるコミュニケーションなど

私のコミュニケーション観： 「約束事」からコミュニケーションを捉える

参考：三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』（勁草書房）
三木那由他『会話を哲学する』（光文社新書）
M. Gilbert, *Joint Commitment*, OUP.



コミュニケーションを通じて、「今後どういうつもりで振る舞うか」という約束事をつくる
その約束事に反する振る舞いをしたら「嘘つき」、「真面目に話を聞いていなかった」などと
非難されることがある

「約束事」づくりとしてのコミュニケーション

- 私たちはコミュニケーションを通じて「約束事」をつくり、互いがどんな「つもり」で今後振る舞うかを決めていっている
- そうした「約束事」を通じて、互いの今後の行動を予測したり、「ああいうことを言ったのだからこうするはず」と期待したりする
- そういった予測や期待に合わない振る舞いをすると、「約束事」に反するものとして非難されることがある

「約束事」への従いかた

毎日？ それとも
次の機会だけ？

休日の部活動は？

欠席や遅刻をするときは？

約束事

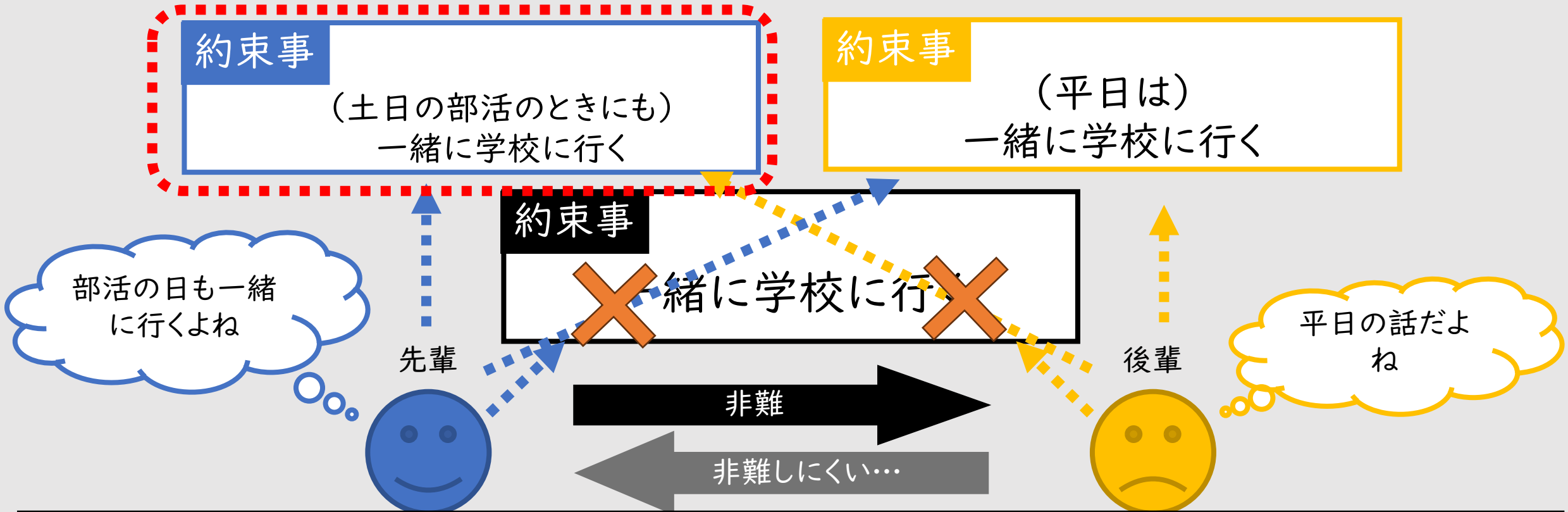
一緒に学校に行く



一般に、「約束事」の形成後に何が起こるかは不確定なため、「約束事」への従いかたが初めからひとつに決まっているわけではない

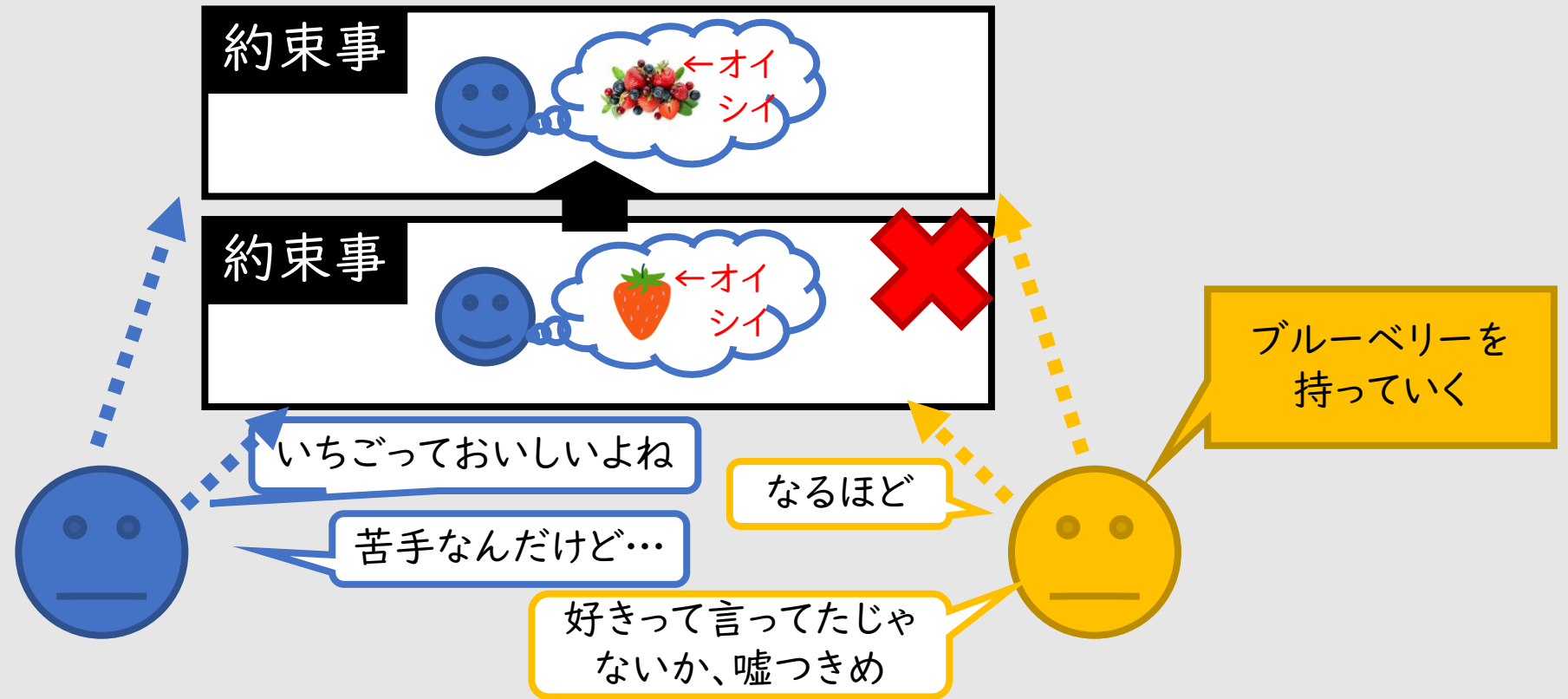
相手が自分の想定する「従いかた」と違うと判断した場合には、相手を非難したり、理由を聞いたりし、互いにそうしたやり取りをすることで少しずつすり合わせる

「約束事」がずれていく



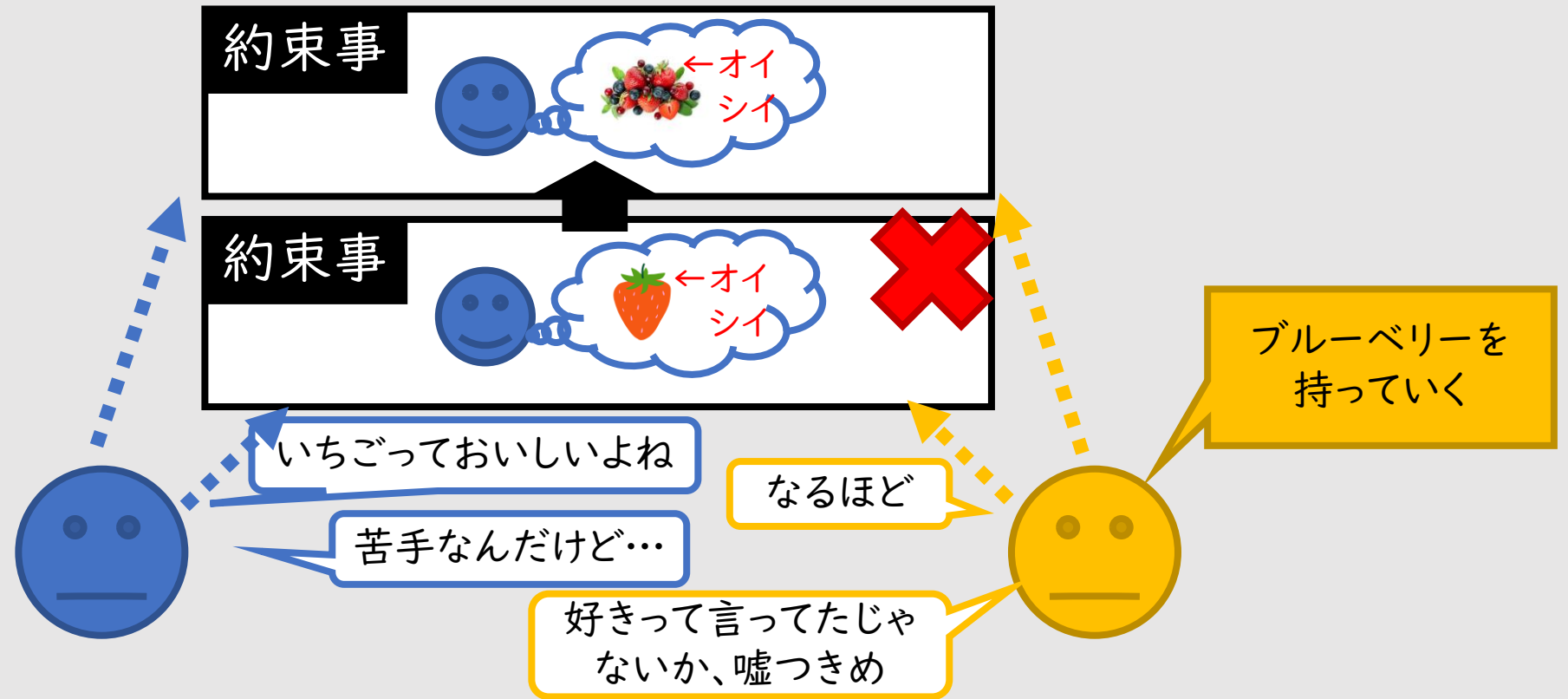
すり合わせが非難などのやり取りを通じてなされるのであれば、参加者のあいだに一方は他方を非難しにくいが逆は非難しやすいなどの非対称性があった場合、すり合わせの仕方もその非対称性に引きずられる可能性がある

「意味の占有」



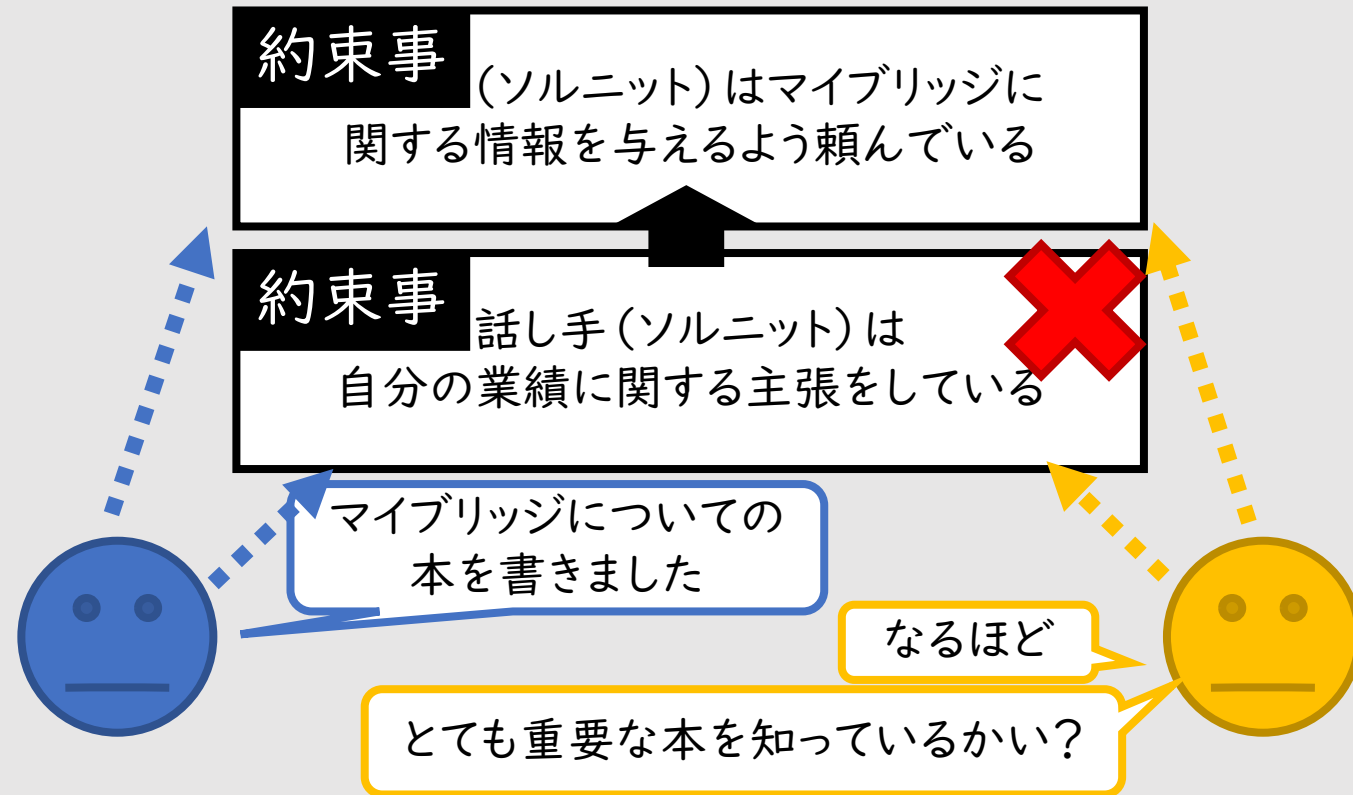
コミュニケーションにおいて会話参加者の力関係に基づいて「約束事」がずらされたとき、話し手が意味したいことを意味できないということが起こりうる→「意味の占有」

「意味の占有」



ずれが起きたとしても、「約束事」自体は維持されるため、参加者はずれたあとの「約束事」に従うよう義務付けられる

マンスプレイニングにおける「意味の占有」



マンスプレイニングの場合、話し手が何をしているのかというレベルにおける約束事がずらされ、「意味の占有」が起きていると考えられる

気になるポイント

- 先輩と後輩、上司と部下などだとわかりやすいが、なぜ男性と女性で「意味の占有」が起きるのか？
 - ひとつの理由は、そもそも男性は現在の社会において女性より上司やその他の権力者になりやすい、という点があるだろう
- 「意味の占有」が起きるのは、一方が他方を非難しやすく、しかし逆方向の非難はしにくいとき

「約束事」の理解がずれたとき

- 私たちは「約束事」の理解がずれ、それに関して簡単には相手と同意に至らなそうなとき、周囲の人々の意見を求めたり、既存の資料を利用したりする
- マンスプレイニングにおける「意味の占有」が起きるのは、そうした利用できる資源の差によるのではないか
 - 男性中心のコミュニティにおける同調する「仲間」の存在
 - アクセスできる資料にすでに組み込まれている偏り
- こうしたしかたで、ジェンダーが個別の会話事例に関与し、「意味の占有」を引き起こし、マンスプレイニングを生じさせていると考えられる

マンスプレイニングと言語行為

単なる誤解？

- なぜマンスプレイングにおいて、女性の主張（のつもりの発話）は情報提供の依頼として理解されるのか
- 単に「本当は主張なのに、たまたまその聞き手が理解力不足のために誤解しただけ」と考えるのは難しい

言語行為論について

- ジョン・L・オースティンの『言語と行為』に基づく
- 言語を抽象的な記号体系などに見なすのではなく、それを用いて私たちが現に行為をしているという側面から捉えなおす

発語行為 (locutionary act)

言葉を発すること、何かを言うということ

発語内行為 (illocutionary act)

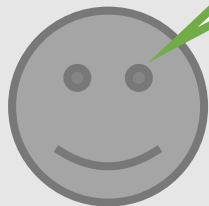
何かを言っているときにしていること

発語媒介行為 (perlocutionary act)

何かを言うことで、聞き手や話し手に対してしていること

この服、
高級品だよ

主張



発語内行為：発語行為＋力 (force)

この服、
高級品だよ



ケース1:事件現場であまり服に詳しくない刑事が被害者の服を見て言う

→推測をしている

ケース2:自分自身の服について述べる

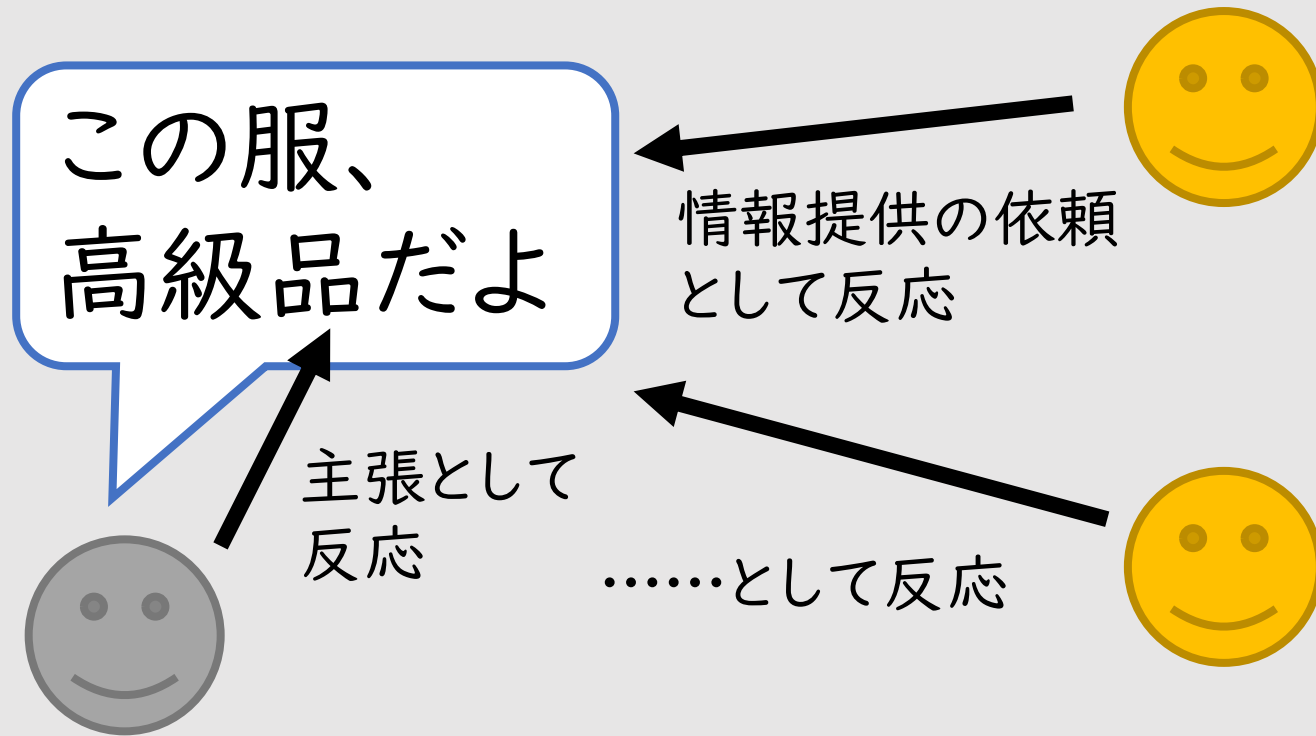
→報告、言明、主張などをしている

同じ文の発話でも、状況次第で異なる「力」をまとい、異なる発語内行為となる

発語内行為と慣習

- 発語内行為は慣習に基づいて成り立つとされる
- 例えば「命令」は発語内行為の一種だが、誰がどんな場面で誰に命令が許されているかは慣習的に決まり、それを外れるとおかしな発話になる
 - 兵士が上官に命令するなど
- すでにある慣習をもとに、それに合わせて発話をする
ことで、発語内の力を得ることが出来る

「発語内の多元主義」(Johnson 2020)



ジョンソンの考えでは、発話を持つ発語内の力は話し手だけが決めるのではなく、聞き手の反応によっても決まる

聞き手の反応はそれぞれが利用する慣習の違いに応じて多様でありえ、発話はそうした多様な発語内の力のすべてを同時に担っている

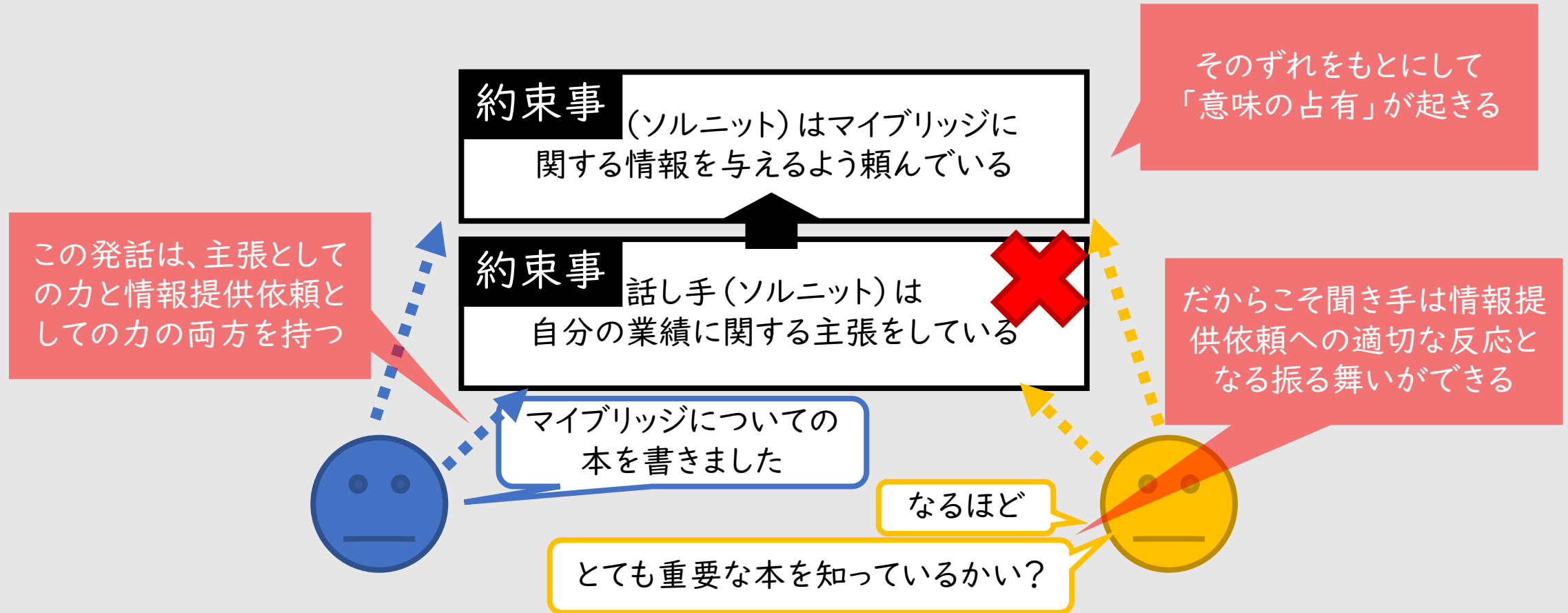
ジョンソンの考えのポイント

- 私たちの発話は、実は発語内行為を自動的にひとつの正しい解釈へと決定するわけではない
- 発話そのものは複数の発語内的力の可能性へと開かれており、聞き手はそれぞれで「ある意味では正しい」反応をしている
- 女性の主張が情報提供の依頼として理解されるのは、単なる個々の男性の勘違いによるのではなく、こうした発語内的力の多元性の影響による

ジョンソンの考えのポイント

- ジョンソン自身は、「女性集団は女性が主張のつもりでおこなった発話を主張として解釈する慣習を持っているが、男性集団はそれを依頼として解釈する慣習を持っている」とする
- けれど、これではその他の「Xスプレイニング」が説明できないので、あとに述べる認識的不正義の話を利用したほうがよさそう
- また、ジョンソンは女性である話し手と男性である聞き手の解釈のずれが生じたときに、なぜしばしば後者が優先されるのかを説明しないが、これについては単に「『意味の占有』によって有利なほうの解釈が『正しい解釈』になる」と説明できそう

マンスプレイニングと発語内的多元性



話し手 (ソルニット) の発話自体には、主張としての力と情報提供依頼としての力の両方を持っており、だからこそ聞き手 (ミスターインポータント) は情報提供依頼に対する適切な反応として、説明をすることができている

言語行為と調整

調整 (アコモデーション, Lewis 1979)

- 「妹は東京で暮らしている」のような発話は、話し手に妹がそもそもいなければ意味をなさない
→話し手に妹がいることを前提としている
- 会話においては、聞き手がまだ知らない前提を含んだ発話がなされたとき、聞き手のほうで理解をうまく「調整」して、その前提が「正しいとわかっていた」ものと事後的に見なすことがある



妹が東京で暮ら
していてね



妹がいるんだな

発語内的調整 (Witek 2021)

- 事前条件 (=発語内行為が成立するためにあらかじめ満たされなければならない条件) が満たされているかどうかわからない発語内行為がなされたとき、調整が働いて事前条件が実は満たされていたかのように事後的に処理されることがある
- 主張の事前条件: 話し手は自分の伝えている内容が正しいという根拠を持っている (Searle 1969)
- 情報提供依頼 (=質問) の事前条件: 話し手は答えを知らない (Searle 1969)

マンスプレイニングと発語内的調整

「意味の占有」と調整により、話し手は関連する情報を持たない=無知であることにされる

この発話は、主張としての力と情報提供依頼としての力の両方を持つ

約束事 (ソルニット)はマイブリッジに関する情報を与えるよう頼んでいる

約束事 話し手(ソルニット)は自分の業績に関する主張をしている

そのずれをもとにして「意味の占有」が起きる

だからこそ聞き手は情報提供依頼への適切な反応となる振る舞いができる

マイブリッジについての本を書きました

なるほど

とても重要な本を知っているかい？

「意味の占有」を通じて話し手(ソルニット)が情報提供依頼をしたことになったことによって、ソルニットは事後的に「知識を持たない者」の地位に追いやられる

マンスプレイニングと発語内的調整

「意味の占有」と調整により、話し手は関連する情報を持たない=無知であることにされる

この発話は、主張としての力と情報提供依頼としての力の両方を持つ

約束事 (ソルニット)はマイブリッジに関する情報を与えるよう頼んでいる

約束事 話し手(ソルニット)は自分の業績に関する主張をしている

そのずれをもとにして「意味の占有」が起きる

だからこそ聞き手は情報提供依頼への適切な反応となる振る舞いができる

マイブリッジについての本を書きました

なるほど

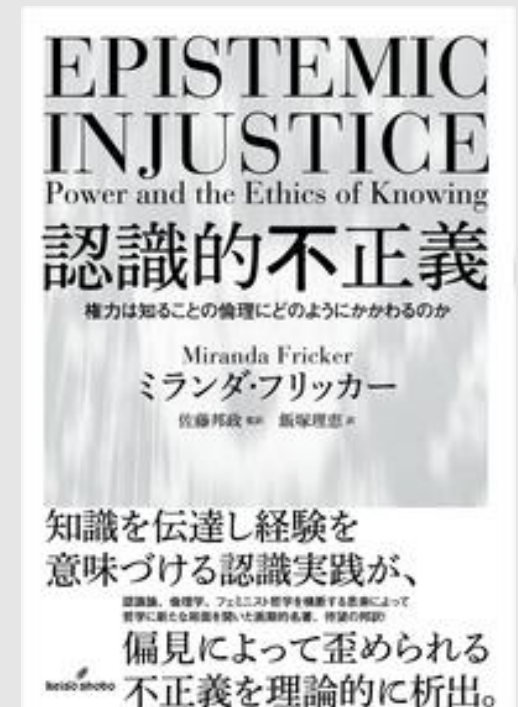
とても重要な本を知っているかい？

「意味の占有」が起きても約束事には従い続けなければ非難の余地が生じるため、話し手(ソルニット)は知識のない者=「無邪気な娘役」としての振る舞いへと規範的に動機づけられる

マンスプレイニングと 認識的不正義

「認識的不正義」(Fricker 2007)

- 社会認識論:ひととひととのやり取りや社会的な実践を通じて、知識がいかに伝達され蓄積されるかを問う
- 徳認識論:知識を、その客観的な正確性などではなく、知識獲得の際に主体が発揮する能力という観点から論じる
- 認識的不正義:そのひとのアイデンティティに対する偏見のゆえに、知識主体が知識の伝達や蓄積のための社会実践への参加を阻害されること



証言的不正義

- 認識的不正義の一種
- 証言主体（話し手）が、聞き手が持つ話し手のアイデンティティへの偏見ゆえに不十分な信用性しか与えられなくなる（十分な能力のある知識主体と見なされなくなる）という害を被ること

マンスプレイニングと証言的不正義

「意味の占有」と調整により、話し手は関連する情報を持たない=無知であることにされる

約束事 (ソルニット)はマイブリッジに関する情報を与えるよう頼んでいる

そのずれをもとにして「意味の占有」が起きる

この発話は、主張としての力と情報提供依頼としての力の両方を持つ

約束事 話し手(ソルニット)は自分の業績に関する主張をしている

だからこそ聞き手は情報提供依頼への適切な反応となる振る舞いができる

マイブリッジについての本を書きました

聞き手が持つ女性への偏見により、話し手の証言主体としての信用性は既存され、それゆえ主張としての解釈がしにくくなる

証言的不正義が発動すると、話し手は主張の事前条件を満たしていると思われやすくなり、情報提供依頼としての解釈へと聞き手を偏らせ、「意味の占有」が起こりやすくなる

「認識役割の機能不全的転覆」 (Dular 2021)

- 認識的不正義の一種
- 一連の会話の役割において、本来は主体的な役割を果たすはずのひとと、受動的な役割を果たすはずのひととの役割が入れ替わり、知識伝達の主体としての働きを阻害されること

マンスプレイニングと証言的不正義

「意味の占有」と調整により、話し手は関連する情報を持たない=無知であることにされる

話し手は「無邪気な娘役」として、聞き手はそれに応じる相手として振る舞うことへと規範的に動機づけられる

そのずれをもとにして「意味の占有」が起きる

約束事

(ソルニット)はマイブリッジに関する情報を与えるよう頼んでいる

この発話は、主張としての力と情報提供依頼としての力の両方を持つ

約束事

話し手(ソルニット)は自分の業績に関する主張をしている

だからこそ聞き手は情報提供依頼への適切な反応となる振る舞いができる



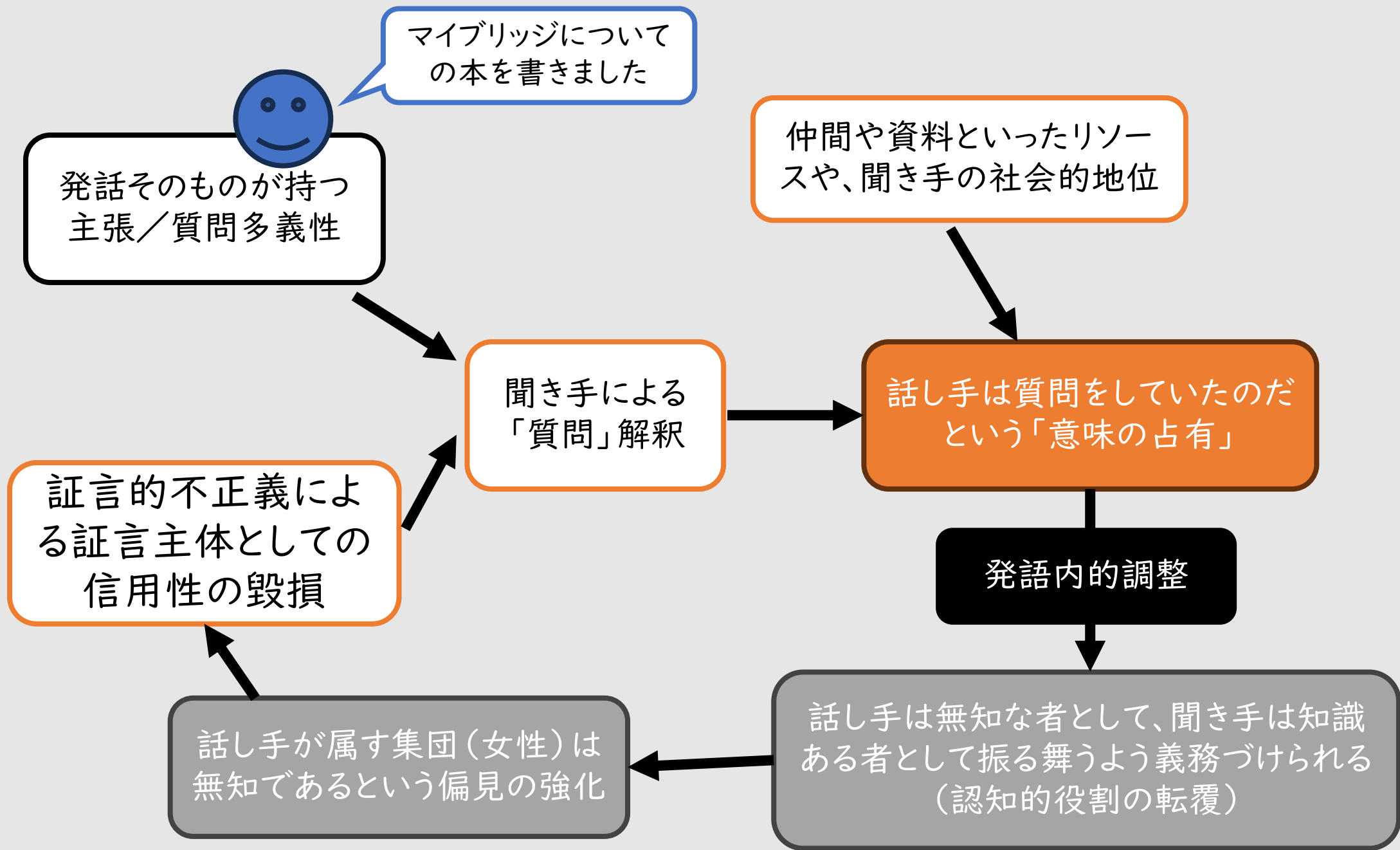
マイブリッジについての本を書きました

聞き手が持つ女性への偏見により、話し手の証言主体としての信用性は既存され、それゆえ主張としての解釈がしにくくなる



「意味の占有」を通じて、話し手の発話は情報提供依頼となり、話し手は無知な者として、聞き手は教える者として振る舞う義務が発生し、結果的に聞き手の側が主体的な役割を奪うことになる

マンスプレイニングのメカニズム



ポイント

- このメカニズムが作動するのは、証言的不正義を引き起こす偏見と、「意味の占有」を引き起こす人脈、資料、地位の有利さ
- ジェンダーはこれらを介して個々のコミュニケーションへと影響を与える
- ジェンダー以外の要素（セクシュアリティ、人種など）も、これらが含まれるなら同様の効果を持つ
- 「意味の占有」の結果として、話し手と聞き手は一定の振る舞いを義務付けられる
- 翻ってそれが当初の偏見の強化に寄与する

文献

- Austin, John L. (1962) *How to Do Things with Words*. Harvard University Press, Cambridge. (ジョン・L・オースティン著／飯野勝己訳『言語と行為』講談社学術文庫、2019年)
- Dular, Nicole (2021) “Mansplaining as Epistemic Injustice”. *Feminist Philosophy Quarterly*, 7(1). Article 1.
- Fricker, Miranda (2007) *Epistemic Injustice*. Oxford University Press, Oxford. (ミランダ・フリッカー著／佐藤邦政監訳／飯塚理恵訳『認識的不正義』勁草書房、2023年)
- Gilbert, Margaret (2013) *Joint Commitment*. Oxford University Press, Oxford.
- Johnson, Casey R. (2020) “Mansplaining and Illocutionary Force”. *Feminist Philosophy Quarterly*, 6 (4), Article 1.
- Lewis, David (1979) “Scorekeeping in a Language Game”. *Journal of Philosophical Logic*, 8: 339-359.
- Luzzi, Frederico (2016) “Testimonial Injustice without Credibility Deficit (or Excess)”. *Thought*, 5(3): 203-211.
- Searle, John R. (1969) *Speech Acts*. Cambridge University Press, Cambridge. (ジョン・R・サール著／坂本百大・土屋俊訳『言語行為』勁草書房、1986年)
- Solnit Rebecca (2014) *Men Explain Things to Me*. Granta Publications, London. (レベッカ・ソルニット著／ハーン小路恭子訳『説教したがる男たち』左右社、2018年)
- Sperber, Dan & Wilson Deirdre (1986/1995) *Relevance*, Blackwell Publishers, Oxford. (ダン・スペルベル&ディアドリ・ウィルソン著／内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子訳『関連性理論(第2版)』研究者、2000年)
- Witek, Maciej (2019) “Illocution and Accommodation in the Functioning of Presumptions”. *Synthese*, 198: 6207-6244.
- 三木那由他(2019)『話し手の意味の心理性と公共性』勁草書房
- 三木那由他(2022)『会話を哲学する』光文社新書